

自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法を 施行した進行期悪性黒色腫の2例

いの うえ まさ や つ むら ひろ と かわ かみ こう し
井 上 政 弥 津 村 弘 人 川 上 耕 史
たか はし つとむ もり やま いち ろう いし くら ひろ と
高 橋 勉 森 山 一 郎 石 倉 浩 人

キーワード：悪性黒色腫，自家末梢血幹細胞移植，
大量化学療法，IL-2，IFN- α 2a

要 旨

今回、我々は標準的治療に対して治療抵抗性の進行期悪性黒色腫の2例に対し、interleukin-2 (IL-2) や interferon- α 2a (IFN- α 2a) を併用した自家末梢血幹細胞移植 (auto peripheral blood stem cell transplantation: auto PBSCT) 併用大量化学療法を施行した。1例は自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法を2回可能であったが、もう1例は1回しか実施できなかつた。さらに免疫療法を併用することにより、抗腫瘍効果の増大と生存期間の延長を期待した。しかし、欧米の報告と同様に抗腫瘍効果は2例とも認められたが、生存期間に対する効果は十分ではなかつた。

はじめに

悪性黒色腫は、転移を生じやすく、治療抵抗性の難治性腫瘍として知られている。特に、進行期の悪性黒色腫 (Stage IV) は、極めて予後不良で生存期間中央値が6から10ヶ月で5年生存率は5%以下である。このグループには無作為臨床試験の報告は少ないが、アルキル化剤である cisplatin (CDDP), dacarbazine (DTIC) など

を2種類以上併用した多剤併用療法を実施して、抗腫瘍効果と生存期間の有意な延長が報告されていることを踏まえて、造血幹細胞移植を併用した大量化学療法が実施された。しかしながら、移植早期の再燃が問題となり治療成績は満足できるものではない。また、進行期の悪性黒色腫に免疫学的療法として IL-2 や IFN- α 2a が有効であり、再発までの期間の延長の可能性が示されている。そこで、今回我々は、再燃、増悪までの期間の延長を意図して、治療抵抗性の進行期悪性黒色腫に対して、抗腫瘍効果を期待して自家末梢血幹細胞移植を併用した大量多剤併用療法を実施し、それに加え、腫瘍無進行期間の延長を目的として IL-2

Masaya INOUE et al.

- 1) 島根大学医学部附属病院腫瘍センター
- 2) 島根大学医学部第三内科

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1